

## トピックス 北地域交流会へ参加しましょう

東京都支部北地域主催の「地域交流会」が、下記の通り開催されます。すでに各教室ではご案内済みですが、ふるってご参加ください。

日時；6月28日（日）午後2時～4時（受付1時30分から）

場所；練馬区南長崎スポーツセンター（大江戸線「落合南長崎駅」A2出口から徒歩3分）

参加費；支部会員 500円 非会員 1000円

## 閑人閑話 兼ねて 旅をうたい拳を詠む 高野山詣で

永年念願の高野山へやっと思って行ってきました。4月29日、大阪へ行ってしばらくぶりに大阪見物をしまして、翌日朝、電車とケーブルを乗り継いで標高約900メートルの高野山へ入りました。この日は奥の院御廟を詣でて、福智院という宿坊に泊まりました。翌日は高野山にとっても詳しい運転手さんの案内で、女人堂、大門、壇上伽藍、金剛峰寺、霊宝館などを回りました。ちょうど高野山開創1200年の特別行事としてご本尊の御開帳、秘仏の公開もあって、たくさんの参詣者で賑わっていました。20万基とも30万基とも言われる墓や供養塔が立ち並ぶ奥の院の印象は強烈でした。また根本大塔のなかの立体曼荼羅の妖しさも同様でした。よくぞ、この山上にこのようなものが、とつくづく考えさせられてしまいました。反面、不謹慎に聞こえるかもしれませんが、巨大な宗教観光施設という感じも同時に浮かんできました。密教について、空海については、いろいろと考えていることも多いのですが、それはいずれ書かせていただきますが、とりあえずの感慨、印象を、大阪とともに短歌でお届けします。【右；根本大塔】



### 【高野山】

咲き盛る枝垂れ桜に迎えられ御廟の道に歩み入るなり  
高僧も武将も庶民も犬さえも大師に抱かれ御廟に眠る  
企業名誇示する巨大な墓あまたCM効果は抜群ならんが  
横死せる息子を祀る小さき碑母の無念のたけを刻みて  
大塔の鮮やかに照る朱の色に大師と丹生の秘密ありとは  
大塔の立体曼荼羅に迷うなり密教という妖しき迷路に



### 【左；桜と春紅葉の競演：奥ノ院】

### 【大阪】

大坂の街、通天閣や道頓堀境界の賑わいには圧倒されました。ド派手でえげつなく陽気で、商魂たくましく。それにしても道頓堀あたりの人の波は半端では無かったです。道頓堀も昔の印象はダダのどぶ川でしたが、橋も遊歩道もきれいに整備されて、遊覧船が行き交って、なかなかの風情でした。大阪の人は商売がやはりうまいですね。

食べた食べたたこ焼き串揚げタラバガニ  
 締めはもちろん夫婦ぜんざい  
 えげつない通天閣の商魂に圧倒されつつ登って下りたり  
 通天閣の座敷わらしと思いが  
 アメリカ生まれと知りし“ビリケン”  
 商魂と工夫に満ちたとんぼりは  
 店とお客の熱気が行き交う  
 橋上と船上ともに盛り上げて  
 道頓堀をジャズボートがゆく

【右、ジャンジャン横丁と通天閣】



さこうべん  
**左顧右眄 (再開)**

【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

第10回 杜甫の悲劇 その1

杜甫（712~770）は詩仙・李白と並ぶ盛唐の大詩人で、詩聖と称されていました。李白が天才型、かつ絶句の名手、杜甫は努力型、律詩・叙事詩の名手とも比較されています。杜甫は、中国三国時代から西晋時代の政治家・武将・学者として有名な杜預（222~284）の末裔、かつ祖父は初唐時代の宮廷詩人と言う名門家ですが、地方役人であった彼の父親の任地、河南省鞏県（現河南省鞏義市）で生まれました。母の家系も唐の太祖に通じる名門家とあって、なんとしても優秀な官僚となって、やや衰えかけている家を盛り立てたいという思いが強かったと言われています。

6歳から詩を作り、13歳から早くも生地に近い副都・洛陽の文人仲間に入り、頭角を現します。18歳になって諸国漫遊の旅に出ますが、23歳の時に、故郷に戻り、洛陽で科挙の進士を受けるも不合格となってしまいます。再び旅に出て、2年後洛陽に戻り、李白と出会い友好を結びます。25歳で結婚し、洛陽に拠を構えます。747年、35歳の時に長安で特別な試験を受けるもまたも不合格。その後長安で必死に就職活動を行い、ようやく755年、43歳で胃曹参軍という軽い役を得ますが、不幸にして安禄山の乱で捕虜となります。1年後脱出してようやく左拾遺（皇帝の側近にあって諫言と正言をすすめる役）を得て肅宗に仕えますが、あまりに真面目に皇帝に直言したため、また派閥の抗争にも巻き込まれて、皇帝に疎まれて、758年には華州（陝西省華県）へ左遷させられてしまいます。志と違って彼の人生の歯車は大きく狂ってしまいます。

1年後大飢饉のため官位を捨て、家族とともに甘肅省を放浪し、さらに四川省の成都に移り、知人の援助により、ようやく小さな草堂を立てて落ち着きます。時に48歳。しかし、途中成都での戦乱もあって、5年後53歳のときに成都を離れて、苦舟を住まいとしながら、病と貧窮に苦しみながら、長江を下り、江南からさらに洛陽、長安を目指す途中船上で亡くなったとされています。享年58歳、まさに失意と漂泊の人生でした。

ということで、彼の代表的な作品を年代順にご紹介してゆきたいと思います。まずは、安禄山の乱で賊軍にとらわれて長安で幽閉されているときに、遠く妻子の安否を気遣って詠った『月夜』から。

月夜	月夜	杜甫(756年・44歳作)
今夜鄜州月	今夜鄜州の月	鄜州；ふしゅう・妻子がいる長安の北の方の村
閨中只独看	閨中只独り看るらん	妻もこの月を独りで看ているだろう
遥憐小儿女	遥かに憐れむ小児女の	当時6歳を頭に2男2女がいた

未解憶長安 未だ長安を憶うことを解せざるを まだ父の状況が分からないだろう  
 香霧雲鬢湿 香霧 雲鬢湿い 妻の豊かな髪は夜霧にしっとり濡れているだろう  
 清輝玉臂寒 清輝 玉臂寒からん 月光に照らされた白いかいなはさぞ冷たいだろう  
 何時倚虚幌 何れの時か虚幌に倚りて 何時になったら帳の陰で  
 双照淚痕乾 並び照らされて淚痕乾かん この月を二人並んで見ることが出来るのだろうか

この半年後、なお賊中であって詠ったのがあの有名な“国破れて山河あり”の『春望』ですが、すでに、「第6回・長安の春」でご紹介していますので割愛しまして、次にご紹介するのは、賊軍から逃れ得て長安で肅宗に左拾遺の役を賜りながら、うまく勤められずに、次第に疎まれて、酒に憂さを紛らわしているさまを詠った『曲江』です。「古希」の出典となった歌でもあります。【右は復元された曲江遺跡公園の画像。場所は大雁塔の近くです。】



曲江

朝回日日典春衣  
 毎日江頭尽醉帰  
 酒債尋常行処有  
 人生七十古来稀  
 穿花蛺蝶深深見  
 点水蜻蜓款款飛  
 伝語風光共流転  
 暫時相賞莫相違

曲江

朝回日日典春衣  
 毎日江頭尽醉帰  
 酒債尋常行処有  
 人生七十古来稀  
 穿花蛺蝶深深見  
 点水蜻蜓款款飛  
 伝語風光共流転  
 暫時相賞莫相違

杜甫(758年・46歳作)

朝廷から帰ると毎日衣服を質に入れ  
 曲江\*で飲んで泥酔して帰る \*曲江池；長安市内の池  
 酒の借金は当たり前、あちこちにある  
 人生七十まで生きることは古来稀だ  
 花の蜜を吸うアゲハチョウが向こうにみえるし  
 水面に尾をちょんちょんつけながらとんぼがゆったり飛んでいる  
 伝えたい、春の風光よ私とともに流転して  
 しばらくはこの季節を楽しみあうこととしよう、と

間もなくして、彼は左遷されて華州（陝西省華県）へ向かいます。759年、47歳です。この前後から、彼は社会詠の叙事詩を多く創るようにもなりました。役人が村から人夫を無慈悲にむりやりに徴用する様を詠った『石壕吏』、戦乱によって落ちぶれて山間で暮らす元貴族の女性を詠った『佳人』、はるか青海省あたりまで出征する兵士の嘆きと、皇帝のあくなき武力政策、拡張政策をなじる『兵車行』など多くありますが、いずれも長歌ですので、内容の紹介は割愛します。

華州は長安の東90キロ、華山のふもとの町ですが、その名山を楽しむ間も無く、翌760年、漢中一帯は大飢饉に見舞われます。また、各地で反乱も起きて、重税と徴兵が民衆をさらに苦しめます。杜甫はついに意を決して官を辞して西へ450キロも離れた山間の秦州（甘肅省天水）へ逃れます。ドングリを食べたり薬草をとって金に換えたりして食いつなぎ、老いと貧窮と病に苦しむ日々でしたが、わづか3か月で、ここを離れて南に120キロ離れた同谷（甘肅省成県）へと移りますが、ここもわずか数カ月しかおらず、さらに南に500キロ以上も離れた四川省の成都（当時は蜀の都）へといわゆる蜀の栈道を超える苦難の旅を行い、何とか同年末には家族ともども成都に着くことが出来ました。

成都にはさいわい幾人かの官職にある知人がいて、その経済的援助で、浣花溪のほとりに小さな草堂を持つことが出来、一家はようやく安らぎの毎日を送ることが出来るようになったのです。

“老妻は紙に描いて棋局(碁盤)を作り、稚子は針をたたいて釣鉤(釣り針)を作る”などというのどかな詩「江村」も残していますが、都へ戻る当てもない現状に悩む次のような詩もあります。

江亭

坦腹江亭暖  
 長吟野望時

江亭

坦腹すれば江亭暖かに  
 長吟して 野を望む時

杜甫(761年・49歳)

坦腹；大の字に寝る  
 長吟して；詩を口ずさみながら

水流心不競	水は流れて心は競わず	
雲在意俱遲	雲在りて意は俱に遅し	
寂寂春将晚	寂寂として春は将に晚れんとし	寂寂；ゆったりと時が流れるさま
欣欣物自私	欣欣として物は自から私す	欣欣；いきいきとしたさま
故林帰未得	故林 帰ること未だ得 <small>(かな)</small> わず	故林；故郷に同じ
排悶強裁詩	悶えを排さんと強いて詩を裁す	裁詩；詩を作ることをいう

(次号に続く)

## アーカイブス「雲の手通信」(再掲・昔のコラム)

けんこうもうごころく  
健康妄語録

健保があるので不健康になる?!

【2004年5月 第2号】

日本の健康保険は世界でもまれにみる立派な“国民皆保険”制度として有名ですが、同時に財政破綻の危機にもさらされています。すでに膨大な赤字を抱えているうえに、さらに今後老人医療費の加速度的な増大が避けられない見通しだからです。日本の薬価や医療設備費が欧米に比べてけた違いに高いとかいう問題も指摘されていますが、何よりも収支を健全に保とうとするメカニズムが働きにくい制度ですから当然な成り行きとも言えます。つまり――

1) 「お医者さん」や「薬メーカー」としてこの制度によって収入や売上を増やしたいというのはごくごく自然な正当な指向です。(検査や投薬をたくさんしないと点数が上がらない診療報酬の仕組みにも問題はありますが) 自ら抑制できるはずはありませんし、それを道義的に批判するのは筋違いでしょう。「商業主義」(つまり“儲けることは良いことだ”)という尺度は、日本のどんな企業でもまた自営業でも個人でも共有している普遍的な物差しなのですから。

2) 一方の「患者」はどうでしょうか、自分の医療費がどんなに高くついているのか自覚がありません。それどころか、自分が積み立てた保険料を取り戻すのだという意識(実は7割は税金ですが)、或いはどうせタダ同然だからどんどん医者にかからなきゃ損だ、薬はとりあえずもらっておこう、棄てても惜しくない、というのが普通ではないですか。また時折摘発される悪徳医師による不正請求も患者側からはチェックしようがない仕組みだから出来るのですね。

3) さらに言えば、この制度を管理運営する「厚生労働省」や「保険組合」はどうでしょうか。中立であるべき中医協幹部が日本歯科医師会から賄路を受けたとされる最近の事件を見ても分かるように、被保険者、納税者の立場よりも、医薬業界の利益をより重視する(或いはその圧力に抗しきれない)傾向が覗い見られます。

こうして考えると当事者すべてに“原価意識”が乏しく、財政悪化の共犯者とも言えます。ところで、熟年者の受診頻度は若い人の4倍以上だそうですが、確かにどこの病院でもお年寄りで溢れていますね。病院の待合室で“しばらく顔見なかったけど病気でもしてたの?”なんてブラックジョークみたいな会話があるそうです。こうして熟年者を中心に病院通いは増える一方ですが、どうしてでしょう? 幾つかの要因が指摘されています。①生活習慣病の増大②薬の飲みすぎや副作用の影響③老化現象(による体の機能低下)を病気と見なす“治療”などなどです。つまり健保があるおかげで、すっかり他力本願になってしまって、人間本来の自然治癒力やそれを向上させようとする意欲が、弱くなった結果とは言えないでしょうか。もちろん社会的弱者救済を目的とする健保の必要性は否定するものではありませんが、制度の構造的な欠陥を早急に改革しないと、ますます「不健康」に、そして最終的には制度の崩壊によって大いなる「不幸」にも見舞われることになるというのが、私の「妄論」です。

いかがでしょうか? 最近では飲まれずに捨てられている「残薬」も社会問題化してきました。